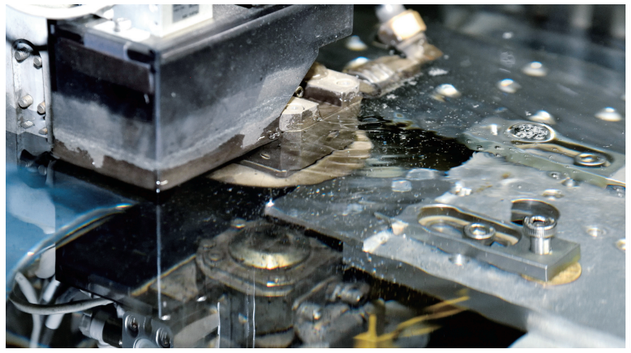
平成26年度 1次公募 ものづくり･商業･サービス革新補助金

ものづくり技術
設備投資

ワイヤー放電加工機導入により、精度が高く複雑な加工を行い、顧客からの信認を勝ち得る

株式会社 平田製作所

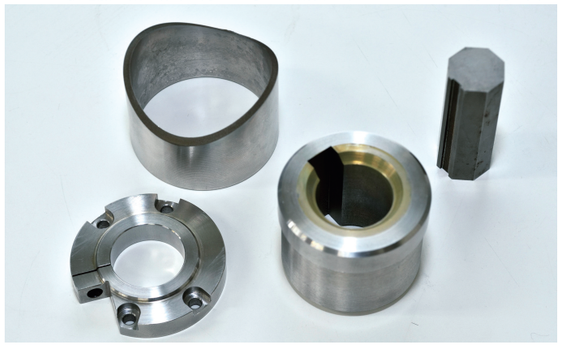
概 要 ワイヤー放電加工機導入でマシニングセンターでは出来なかった高精度な加工を行うことで、自社施工率を高める。さらに収益力と納期の短縮化への対応力を向上させる。



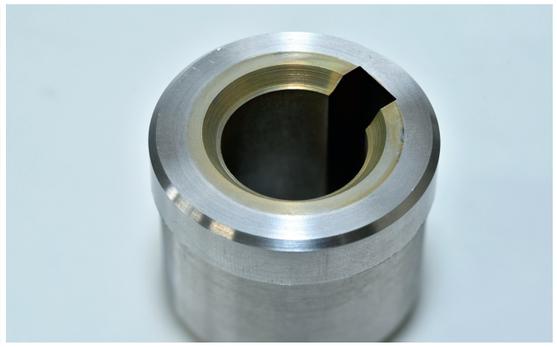
ワイヤー放電加工機の作業風景。注水した機械の中でワイヤーが金属を切り出す。



導入したワイヤー放電加工機



ワイヤー放電加工機で同社が加工した部品の数々。



これがキー溝加工。右上の四角い穴が特徴だ。

企業情報

会 社 名 株式会社 平田製作所
代 表 者 代表取締役 平田 亮一
所 在 地 〒873-0511 大分県国東市国東町小原6306番地
実施場所 〒873-0511 大分県国東市国東町小原4291番地
T E L 0978-72-4093
F A X 0978-72-4118

事業内容 精密部品加工
資 本 金 1,000万円
設　　立 平成元年6月
社 員 数 9名



背景・経緯

取引先の要望に応えるため精密加工の内製化に取り組む

株式会社平田製作所のルーツは、地元に根付いた機械の製作からはじまった。国東で栽培されるイ草は、畳表に使われる地元の特産品。先代社長の平田勇一氏が、このイ草を刈り取る農業用機械を旋盤ひとつで作り始めたのが昭和57年のことである。

以降、同社は農業用機械の製作を行っていたが、イ草栽培の衰退と入れ替わるように大手電機メーカーが国東へ進出してくると、仕事の内容も半導体製造装置などの精密部品加工へとシフトしていった。県外からも多くの注文が届くという同社には、仕事の確かさに加えて国東ならではの地の利もあるようだ。図面を送られて、部品ができるとすぐに飛行機で送るということも、空港のある国東市の強みである。

そんななか、取引先からの要望は年々さらに精密になり、工期にもシビアになってきた。そこで、これまで外注に出していた加工を自社で行えるようにすることで、収益力と納期の短縮化への対応力を高めることにしたという。

事業内容

品質の向上につながるミクロ単位の高精度金属加工

今回の補助金で導入したのは、ワイヤー放電加工機。これは硬い金属の刃で削ったりするのではなく、熱で材料を溶かして加工する方法のもの。直径0.2ミリほどの極細のワイヤーを電極にして放電加工することで、これまでは難しかった直角などの切り出しが可能になるという。

これと同様の機械は今まで同社にはなく、とくに主力製品であるキー溝の加工には欠かせない機械だという。キー溝は丸い穴に四角い穴が繋がった、鍵穴のような形。これまでキー溝を製作する場合には、中央の丸穴を同社で加工した後、四角い穴の加工は外注に出していた。既存の機械で加工すると、どうしても角の内側が直線にならず丸みをおびてしまうからである。そうなると納期もこちらの都合より外注先の都合を優先されるため、必然的に工期が長くなる。さらには加工コストの負担も大きかった。

それらの問題が、この機械を導入するとこで解消されるのだという。

まとめ

最新の機械を導入することで所内の環境が変わり、より高精度な製作所へと生まれ変わった。

成　果

品質・コスト・納期すべての面で、これまでの問題を解消

ワイヤー放電加工機を導入後は、キー溝加工をはじめとして高精度な穴加工・ピン角加工・歯車など、さまざまな金属加工の全行程を自社で行えるようになった。これには外注費の圧縮ということも大きいが、取引先から納期を聞かれた際にすぐに回答でき、それを確実に守ることができることが大きな効果だと平田代表は語る。

精密な仕事と正確な納期は、仕事の上でなによりも大切。そうすることで取引先からの信頼もより高くなり、実際に仕事も増えていったという。

展　望

加工精度と労働環境の質を高めたWin Winな製作所へ

これからも常に新しい設備を導入して、加工の精度やスピードアップなどの取引先のニーズに対応していく。安い人件費などで仕事が海外に流出する分野もあるが、精密な仕上がりが求められる金属加工の仕事は、国内企業に厳然と需要がある。今後も、他社がやらない仕事を引き受ける“かゆいところに手が届く”製作所として取引先の要望に応えながら、付加価値のある製品作りに励む。

社内的には、加工用の機械メーカーを統一することで社員全員が機械操作やプログラミングを共有し、だれでも操作できる体制を整えた。これにより交代で有休も取りやすくなり、より働きやすい職場になったという。

会社も取引先も社員も、みんながWin Winになる会社にしたい。そう話す平田代表の言葉が印象的だった。